

Title	「文藝時代」
Author(s)	小澤, 純
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 14-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97238
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

追悼文を読む

「文藝時代」

小澤 純

新世代社版「文藝時代」は昭和二十三年一月に創刊、「編集後記」に「やがて同人として名をたつらねることができぬほどの対立を示すかもしれない」（福田恆存）とあるように、太宰を含めた新旧の文学者三十一名（後に林芙美子・武田泰淳らが参加）によって始められた同人雑誌である。また戦前に「行動」編集長だった豊田三郎は、川端に「御許し」を得て「文学史的な誌名を受け継ぐ」経緯と「ジャーナリズムから作家の中心をまもるといふ消極性はかりでなく、時代にプラスするやふなものが生れてくること」への抱負を同頁で語っており、前期は豊田を中心に編集された戦後版「文藝時代」という同誌の緩やかで雑多な性格が窺える。三月号の座談会「現代作家論」ではまず太宰が取り上げられ、「斜陽」流行の中でその限界を指摘する舟橋聖一、「主観性の問題」へと関連付ける椎名麟三など、取り交わされる見解も多様を極めた。

四月号巻頭に掲げられた太宰「徒党について」は、群れを罵り「孤高」と自らを号してゐる者の「キザ」を批判し「徒党」と「孤低」双方の苦しさを語りながら、「仲間同士、公然と裏切るところからはじまる」ような「新しい徒党の形式」を提示している。このエッセイが同誌に発表される背景は五月号「後記」で説かれており、豊田は平林たい子の文壇ギルド批判や、白井明（＝林房雄）が「本誌の記事をかゝけて、文壇グループを論じ、このところ、作家の集団をめぐつて、賛否両論がやかましい」ことに触れたうえで、「『文藝時代』の同人は、太宰氏のいふとほり、公然と仲間を裏切ることが第一の公約として集つて」おり、「次号あたりから、この雑誌の特色が出て来さうな気がする」と締め括っている。いわば「徒党について」は、掲載誌のあり方を媒介にした外部／内部両面へ向けた太宰流の批評の試みだったといえよう。実際に八月号「後記」には「短い文章だったが光った文章で、かなり反響があつた」とある。それに呼応するかのように六月号で豊田は「内容の充実」を唱え、「今日の問題」を扱った座談会「神と人間を語る」の成功を記す。だが、ようやく同人活動が軌道に乗り始めた矢先に太宰の訃報が届いたのであり、七月号「後記」で豊田は率直に「太宰君に見すてられたやうで、情けなく、恨めしい」と記し、同時に「神から罰じられ、民衆から鞭うたれるところに、彼の救ひがあるのではないか」と前号のテーマを鏝めつつ「次号は太宰治追悼号としたい」と予告、同人の死という特権性を印象付けている。

八月の「太宰治追悼特集号」には十本を超える追悼文と座談会が並ぶ。表紙絵は入水を連想させる川縁

であり、見返しには弟子・別所直樹が所持する遺影、その裏に書かれた太宰の遺墨〈惜別〉が紹介された。特集「太宰治の文学・生活」にはまず非同人で『魯迅伝』（41・3）によって『惜別』に影響を与えた小田嶽夫を載せ、資料との対応が図られている。小田は太宰の道化が「奉仕の精神から生れる悲痛なものであり、『近ごろの日本の世』に耐え得ない、「人格」であったことを悼み、「中央線の古い先輩や友人とのつき合ひをわざと避けてゐた」ことを惜しんだ。今官一は出征したときに預けた古原稿を疎開先まで持ち歩いてくれた律儀さを回想、青山光二は「桜桃」に「礼儀正しい職業意識の乃至は良識の哀しさ」を感じ、織田作之助の葬儀での「身についた形の良さ」や通夜に来なかつた安吾を批判する「古風な義理」、さらに一周忌での「綺麗な手」の印象を並べながら敢えて「無頼派」の語を用いた。福田清人は十年前にもらつた『虚構の彷徨』を再読、その「虚無感」と「戦後の暗さ」の中の死を結びつける。伊馬春部は、書き送つた感想を太宰が疎かにせず、その指摘によって好調がもたらされたと打ち明けられたときの愛おしさと厳肅さについて記す。泰淳は竹内好『魯迅』（44・12）に書いた跋文を太宰が目にした「小事」を記憶に留め、徳田一穂は戦前の道化には二・二六事件以後の現実に処す方法として共感するが、「人間失格」における道化には「素直について行けない」と違和感を表明する。野口富士男が「道化の華」を引きながら「おそらく今度の死因もまた、太宰氏にとつては「何もかも」であつたのだ。太宰氏の近作の読者ならば、すぐにでもわかることである。まして友人の方々がそれを「わからない」筈など、絶対にあり得ないと思ふ」と記しているのは興味深い。一年後、野口は追悼一周年号を企画編集することになる。田辺茂一は太宰喪失後の「わが党の作家」は安吾・石川淳を残すのみで、葬儀委員長が豊島与志雄であることに不満を漏らしている。松岡照夫は太宰が語つた「空無」について記し、江口榛一は哀悼詩を掲載した。

そして座談会「太宰治の死について」において、豊田は太宰の死が我々に「身近」であると発言し、福田はジャーナリズムによって太宰が心身を消耗し「人間失格」も筆が荒れていると指摘する。一方椎名は小説が書けなくなつたこと以外に死の原因があるとし、神を信じられない中でいかに生の罪深さを感じていたのかを問い、福田が「倫理的な潔癖感」に帰すのに対し、「原罪」を自覚し切れず「神と呼んですました得た」ことから生じた「自然死」と断じた。このように論点は毎号の同人間での座談で共有され敷衍され

たものが多々あり、例えば太宰と高見順を「原罪意識」の深浅で比較したりする。追悼文では主に織田との比較が多いが、座談会では芥川と対比されることが多く、自殺の計画性と衝動性、「家長意識」の有無などが挙げられ、また自ずと椎名が太宰のぶつかった問題意識を継ぐべきであると促された。芙美子が誰も触れない「啞の子供さんの問題」を指摘したことも重要である。福田の「精神的にも、文学史的にも、伝統のない作家」という位置付けを、遅刻してきた伊藤整が「私小説の伝統」から「たえず生活自体を実験」する「技巧家」として東西の文学史にその革新性と危険性を探り変奏させたことは特筆に値しよう。また座談会の後の頁に掲載された特集とは別枠の檜崎勤「太宰治氏への手紙」は、「新潮」編集者時代に「ダス・ケマイネ」を見出したときの驚きなどを、身内的追悼文とはやや趣を異にする冷静な態度で綴り、「風雪」同人でもあった芥川賞作家・多田裕計は連載中の文芸時評で「太宰文学の欠如は、何といつても立体的な構想性の不足」と批判し不協和音を奏でた。「後記」で豊田は、三ヶ月前から太宰・福田対談の企画があり、「情死の前日、編集部の西君が対談の打合せにゆき、廿日すぎなら都合がい、」と伝えられたことから、心中について「決行の日時は決めていなかった」と類推している。

九月号にも北原武夫が追悼文を書いているが、太宰の死を神話化しようとする青年が出現することへの懸念、舟橋は太宰の収入をめぐるデマを記すなど、すでに距離感がある。座談会「二十世紀文学展望」では花田が太宰文学の「小市民的なヒューマニズム」を指摘し、同誌での太宰への言及は一旦沈静化した。雑誌全体の動きとしては十一月号から編集委員制となるが、その「後記」では「近代文学」の同志的強さや「風雪」の党派的な賑やかさに比べて「地味すぎる編集方針」であったことへの豊田の反省が語られ、「編集陣の強化をはかつて」毎月二人で編集責任を持つ旨が記されている。最後に「八月号の「太宰追悼号」以来、読者の指示が出来て来た際なので」とあり、その売れ行きが同誌の経営に与えた影響が窺える。十二月号「後記」で梅崎が「私個人でいへば、出版資本に結びついた同人雑誌にたいし、あかるい見通しは持たない。しかしこれが余儀ない状態だとすれば、それをもつとも効果たらしめんことに努める他はない」とあることから確かである。昭和二十四年三月号「後記」で田辺茂一が、「太宰の死に際しては、デカデカと書いたが、島中雄作の死に対しては、たつた三行くらいだった」と、元中央公論社社長の

死の報道が軽く扱われたことへの憤りに太宰の死を対比させることから、ジャーナリズムでの価値の高騰と定着が分かる。四月の欠号を挟み五月号「後記」で福田は「寄合世帯の同人誌の弱点を、この雑誌はことごとく背負ひこんでゐる」とし、六月号「後記」でも同誌の母胎「新世代」から関わっていた高木卓が「性格が曖昧なことが、今では却つて一つの性格になつたが、「文藝時代」はそれ以外には性格の持ちやうがなかつたといへよう」と総括し、次号からは野口が編集の全責任を取ることが伝えられている。

そうした経緯で七月の最終号は没後一周年に合わせて特集「思ひ出の太宰治」となつた。青山「太宰治と織田作之助」は二人の志賀への批判を鋭くなぞり、同時に「才能」による二作家の限界も指摘すること、「今後の文学的現実」への課題を明確化する。「思ひ出」を綴つたのは因縁のあつた四名の作家で、滋味溢れるものになっている。芙美子は一年前の座談会で語つた織田夫人と太宰をめぐるエピソードを説き明かし、今は故人を偲ぶ《櫻桃忌》を提唱、伊馬は故人と過ごした頃の「古日記」を紐解いている。槽崎は心中事件に対する昨年の「ジャーナリズムの軽薄さ」を難じ、また「新潮賞」候補に久保田万太郎が太宰を毎年推していたことを記した。「後記」では野口が、一周忌を迎えたことで「ファナチックな太宰熱」が収まり始め、ようやく「真の太宰の読者」が現れてくることを期待、太宰の志賀への反抗の意味を冷静に見据え、「暗夜行路」と「斜陽」、「クローディアスの日記」と「新ハムレット」とを読み比べる必要を説き、「志賀の生きた時代は個人主義の時代であつた。彼は太宰を理解できる魂がなかつた」と閉じた。こうして「文藝時代」は、同人誌と商業誌の中間的なあり方を戦後ジャーナリズムの波に強く晒されながら模索し続け、全十八号の歴史を終えた。いわば同誌の太宰をめぐる表象の変化には、時代が追い求めた太宰の虚像と各同人たちに映つた実像との齟齬や揺れが、鮮明かつ微細に刻み込まれていたのである。